

「小学生の放課後の居場所事業のインパクト評価」
に係る分析結果報告書

令和6年4月
慶應義塾大学 SFC 研究所

目次

第1章	はじめに.....	2
第2章	分析の意義.....	2
第3章	調査概要.....	4
3.1.	放課後の活動の質の調査.....	4
3.2.	施設スタッフ対象調査.....	6
3.3.	保護者対象調査.....	6
第4章	分析結果.....	8
4.1.	放課後の活動の質データのサマリー.....	8
4.2.	放課後の活動の質に影響を与える要因の検証.....	10
4.3.	放課後の活動の質が児童に与える影響の検証.....	15
第5章	まとめ.....	23
参考文献	24
参考資料1	「子どもの強さと困難さアンケート」の質問項目.....	25
参考資料2	「他者評価式幼児用自尊感情尺度」の質問項目.....	26

第1章 はじめに

2023 年度より開始した特定非営利活動法人 放課後 NPO アフタースクール（以下、「放課後 NPO アフタースクール」と表記）との共同研究「小学生の放課後の居場所事業のインパクト評価」では、小学生の放課後の過ごし方が児童の発達および非認知能力などの向上につながるかを明らかにすることを目的としている。この目的遂行のため、本研究では放課後 NPO アフタースクールが直営、または運営をサポートしている放課後の居場所および学童の施設を対象に、放課後の活動の質に関する調査および、施設運営に携わるスタッフおよび利用者の保護者を対象に施設の運営状況や児童に関する質問紙調査を実施した。

本報告書では、分析の意義を述べたうえで、調査内容および収集したデータをもとに学童保育の質と児童に関するアウトカムの関係性を定量的に分析した結果を報告する。

第2章 分析の意義

幼少期の体験は児童の成長や発達を促すのに重要な要素であり、子どもの認知能力や非認知能力に影響を与えることが知られている(Kautz et al., 2014)。国内においても、文部科学省の受託調査によると、小学生の頃の自然体験や社会体験、文化的体験が多いほど、高校生のときの自尊感情や外向性、精神的な回復力が高い傾向にあることが分かっている(浜銀総合研究所, 2021)。また、そのような体験の正の影響は、収入レベルが相対的に低い家庭の児童においても確認されている。

しかし近年、2020 年以降新型コロナウイルスの蔓延に伴い、臨時休校や学校行事の中止などによって児童の体験は大きく制約され、成長や発達への悪影響が問題視されている。日本財団・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(2021)によると、自己肯定感などの非認知能力は臨時休校の期間が長いほど低い傾向にあり、特に小学校での学校行事の中止は非認知能力に対して影響を及ぼした可能性があることが分かった。Asakawa & Ohtake(2022)は、奈良市の学力調査データを用いて、コロナによる学力や非認知能力への休校の影響を検証した。分析の結果、休校によって学力は一時的に下がったものの、その後回復したことが分かった。ただし、休校中や休校明けの生活状況が良かった児童とそうで

なかった児童の間では、学力や非認知能力に差が広がったことが示された。上述の浜銀総合研究所(2021)において、親の収入や学歴の水準が高い家庭の児童ほどより様々な体験をしていることが分かっている。Asakawa & Ohtake(2022)の結果の背景には、失われた体験の機会を補うことができた家庭とそうでなかった家庭、双方が存在していたことが推察される。

このような状況下において、学童保育の果たしうる役割は大きいと期待されている一方で、2022年12月に厚生労働省が公表した調査結果によると、前年比で待機児童数が増え、1万5000人に達した。また、高学年を中心とした隠れ待機児童の問題も指摘されている。厚生労働省と文部科学省は「新・放課後子ども総合プラン」のもと、学童保育の受け皿の整備を急速に進めているものの、量的拡大に注力するあまり学童保育の質が見過ごされる可能性が指摘されている。

この点は幼児教育の量的拡大と共通している課題である。海外の例では、カナダ・ケベック州において、保育所の利用料の引き下げにより保育所の利用が増え、結果的に保育の質が下がった(Japel et al., 2005)。この質の低下は、このとき保育所を利用した子どものその後の非認知能力などに悪影響を及ぼしていたことが分かった(Baker et al., 2019)。このように、質を顧みない学童保育の量的拡大は、子どもたちの将来に悪影響を与える可能性が考えられる。

海外の先行研究では、小学校で行われる課外活動プログラムは児童の自尊心やアイデンティティの確立に正の効果があることが示されている(Liu et al., 2015)。このLiu et al. (2015)の結果は、海外で行われた25のランダム化比較試験の結果をメタアナリシス分析したのもので、研究によって効果量にバラつきがあることも報告されている。すなわち、どのような内容の課外活動が効果的であるかについてはさらなる研究の余地がある。

国内の課外活動の効果検証を行った研究は上述の浜銀総合研究所(2021)にもまとめられているが、ほとんどが短期的な体験プログラムへの参加の効果を検証したもので、日常的に実施される学童保育の効果を検証した研究は未だない。また、体験プログラムの質による参加の効果の違いを定量的に論じた研究も未だない状況である。

このような課題認識および研究の背景のもと、本研究では、学童保育の質と児童に関するアウトカムの両データを用い、両者の関係性を定量的に分析する。

第3章 調査概要

本研究では放課後 NPO アフタースクールが直営、または運営をサポートしている放課後の居場所および学童の施設（以下、「施設」）を対象に、放課後の活動の質に関する調査および施設運営に携わるスタッフおよび利用者の保護者を対象とした質問紙調査を実施した。

調査対象となる施設の候補は放課後 NPO アフタースクールが選別したのち、施設関係者および自治体に調査協力の依頼を行った。その結果、調査対象施設の総数は24か所となり、そのうち東京都および神奈川県、千葉県のある施設が16か所、関西地方のA市の施設が8か所であった。この24施設を対象に、①保育環境評価に関する調査および②施設運営に携わるスタッフ対象の質問紙調査、③利用者の保護者を対象とした質問紙調査をそれぞれ実施した。本章では各調査の概要を説明することとする。

3.1. 放課後の活動の質の調査

本研究では各施設における活動の質を計測するために、School-Age Care Environment Rating Scale と呼ばれる尺度を利用した。具体的には、「新・保育環境評価スケール④放課後児童クラブ」（School-Age Care Environment Rating Scale, Updated, Harms et al., 2014; 埋橋訳, 2019、以降「SACERS」と表記）をもとにチェックリストを作成し、調査員を派遣し、調査員による観察調査を行った。

SACERS は元々、5歳から12歳までの子どもが学校外で過ごす間の保育と教育の質を評価するために開発された調査ツールである。表1にあるように、SACERS は7つのサブスケールで構成されており、各サブスケールは3～10の項目で評価され、全体では47の項目が存在する。各項目はさらに6～16の指標に分かれ、それぞれ「達成」「不達成」のいずれかで評価される。この指標の結果をもとに各項目は1～7点で点数化され、1点が「不適切」、3点が「最低限」、5点が「よい」、7点が「とてもよい」と解釈される。今回の調査では、1施設につき2名調査員が調査を行い、2名の調査結果の平均を取り各項目の点数を決定した。サブスケールのスコアは項目の平均値によって、SACERS 全体のスコアはサブスケールのスコアの平均値によって、それぞれ算出した。

表 1 SACERS の構成

① 空間と家具	② 健康と安全	③ 活動
<ul style="list-style-type: none"> - 室内空間 - 運動できる空間 - ひとりになれる空間 - 室内のレイアウト - 生活の家具 - 学習とレクリエーションのための家具 - くつろげる家具 - 運動のための設備・用具 - 学校との連携 - 支援員のための設備 	<ul style="list-style-type: none"> - 衛生管理の方針 - 衛生管理の実践 - 緊急時の対応 - 安全対策の実践 - 出欠席 - 帰宅 - 食事/おやつ - 子どもの衛生週間の確立 	<ul style="list-style-type: none"> - 製作 - 音楽とダンス - 構成遊び - 演劇 - 言語/読みの活動 - 算数/思考の活動 - 科学/自然の活動 - 多様性の認識
④ 相互関係	⑤ 育成支援計画	⑦ 特別支援
<ul style="list-style-type: none"> - 来所/帰宅 - 支援員と子ども - 支援員と子どものコミュニケーション - 子どもの見守り - 望ましい習慣・態度の育成 - 子ども同士 - 支援員と保護者 - 支援員同士 - 支援員と担任教師 	<ul style="list-style-type: none"> - 日課 - 地域資源の活用 - 自由選択活動 	<ul style="list-style-type: none"> - 特別支援を要する子どもへの対応 - 個別対応 - 学習とスキルの向上 - 関与 - 子ども同士のやり取り - コミュニケーションの促進
	⑥ 研修	

(注) 太字がサブスケールを指す。

(出所) 「新・保育環境評価スケール④放課後児童クラブ」 Harms et al., 2014; 埋橋訳, 2019

観察調査を行うにあたり、2023年9月から10月にかけてSACERSの翻訳者である埋橋玲子教授（大阪総合保育大学児童保育学部）をお招きし、東京都およびA市において座学および実地での調査員の研修を行った。

観察調査は2023年9月から2024年2月にかけて実施された。今回、調査員は放課後NPOアフタースクールのスタッフが務めており、合計で11名の調査員が観察調査を行った。1施設につき2名調査員が調査を行い、調査員が担当した施設の数是最小で1、最大で11であった。観察時間は午後2時ごろから3時間半程度（児童の来室から帰宅管理まで）であり、調査員は施設を利用している児童と関わりを持たず、保育の補助もしていない。

3.2. 施設スタッフ対象調査

本研究では、前節で説明した SACERS のスコアやサブスケールのスコアがどのような要因によって決まるかを検証するために、各施設で支援員やスタッフとして働かれています方を対象に質問紙調査を実施した。調査は 2024 年 3 月 12 日から 4 月 7 日にかけて行われ、放課後 NPO アフタースクールを通してオンラインでの質問フォームを配布し、回答を依頼した。主な質問項目は支援員やスタッフとしての勤務年数や週の勤務日数、放課後児童支援員認定資格などの資格や免許の有無、普段の業務の負担感などである。表 2 に示したように、施設ごとに回答数にバラつきがあるものの、17 の施設で回答が得られ、有効回答の総数は 102 であった。

3.3. 保護者対象調査

続いて、SACER で測った放課後の活動の質が児童にどのような影響を及ぼしているかを検証するために、各施設を利用している保護者にも質問紙調査を実施した。調査は 2024 年 3 月 12 日から 4 月 7 日にかけて行われ、放課後 NPO アフタースクールを通して各施設に利用者の保護者向けにオンラインでの質問フォームの配布を依頼し、回答を募った。施設ごとの有効回答数は表 2 にある通りで、17 の施設で回答が得られた。

本調査では児童の学年や性別、家族構成、父親や母親の就労状況などの基本情報に加えて、児童の情緒や行動、自尊感情、病気やけがに関する質問および施設の利用頻度や施設の評価を尋ねた。児童の情緒や行動については、「子どもの強さと困難さアンケート」(Strength and Difficulties Questionnaire, 以下、「SDQ」と表記)と呼ばれる尺度を利用した。SDQ は子どもの情緒や行動を親や学校教員が測定するために開発されたもので、海外のみならず国内においても科学的に信頼性や妥当性が保証されている。SDQ は大きく「困難さ」と「強み」の項目に分けられ、「困難さ」は「情緒の問題」、「行為の問題」、「多動/不注意」、「仲間関係の問題」の 4 つの下位尺度で、「強み」は「向社会的な行動」の 1 つの下位尺度でそれぞれ構成されている。各下位尺度は 5 つの質問で計測され、各質問に「あてはまらない」、「まああてはまる」、「あてはまる」の 3 件法で回答する。回答は 0 点から 2 点で得点化され、各下位尺度は回答の合計点で、「総合的困難さ」は「困難さ」の下位尺度の合計点で算出される。各項目の質問内容は参考資料 1 を参照されたい。

表2 施設ごとの有効回答数

	運営スタッフ	保護者
東京圏		
施設 1	8	17
施設 2	1	0
施設 3	5	27
施設 4	0	0
施設 5	7	33
施設 6	5	26
施設 7	0	0
施設 8	11	14
施設 9	0	0
施設 1 0	0	0
施設 1 1	9	0
施設 1 2	15	9
施設 1 3	7	44
施設 1 4	5	24
施設 1 5	4	21
施設 1 6	15	60
A 市		
施設 1 7	0	8
施設 1 8	0	12
施設 1 9	0	7
施設 2 0	2	2
施設 2 1	4	12
施設 2 2	2	5
施設 2 3	1	10
施設 2 4	1	18
合計	102	349

自尊感情の質問群は勝浦・浜崎（2023）が開発した「他者評価式幼児用自尊感情尺度」を利用した。この尺度は「自己信頼・主体性」と「協調性・達成意欲」の二つの下位尺度から成り、全部で10の文章に対して、「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「少しあてはまる」、「とてもあてはまる」の4件法で回答する。回答は1点から4点で得点化され、各下位尺度は回答の合計点で、全体の自尊感情は下位尺度の合計点で算出される。各項目

の質問内容は参考資料2を参照されたい。

第4章 分析結果

本研究では、収集したデータをもとに（１）放課後の活動の質データのサマリー、（２）放課後の活動の質が児童に与える影響の検証、（３）放課後の活動の質に影響を与える要因の検証の三つの観点から分析を行った。以下、分析結果を順番に報告する。

4.1. 放課後の活動の質データのサマリー

表3にSACERSの平均スコアを、全施設と東京圏、A市それぞれについて示した。全施設のSACERSの全体スコアの平均値は3.783で、SACERSのスコアの3が「最低限」と解釈されることを踏まえると、平均的には最低限のレベルよりもわずかに上の状態であることが分かる。サブスケールの中では、「相互関係」や「育成支援計画」、「研修」のスコアが高い。「特別支援」については、特別支援が必要と認定された児童が在籍している場合のみ評価を行ったため、観測数が他の項目と異なり、全体で6（東京圏が5、A市が1）となっている。SACERS全体の平均スコアを算出する際には「特別支援」の項目は含めていない。東京圏とA市の施設で比較すると、全体およびいずれのサブスケールにおいても東京圏の施設の方が平均スコアが高い。

表3 SACERSの平均スコア

	全体	空間と家具	健康と安全	活動	相互関係	育成支援計画	研修	特別支援 ¹
全施設 (N=24)	3.783	3.732	3.997	3.181	4.690	4.698	4.333	2.722
東京圏 (N=16)	4.192	4.217	4.475	3.406	5.080	5.271	4.958	2.783
A市(N=8)	2.963	2.761	3.042	2.729	3.911	3.552	3.083	2.417

(注1) 全体の観測数は6（東京圏が5、A市が1）。

図1は全施設の SACERS のスコアの分布を示している。全体およびいずれのサブスケールについてもスコアにバラつきがあることが確認できる。とりわけ「育成支援計画」や「研修」のバラつきが大きく、「活動」のバラつきが比較的小さい。いくつかのサブスケールについては、「よい」と解釈される5点以上のスコアの施設が一定数の数存在することが分かる。

図1 SACERS スコアの分布

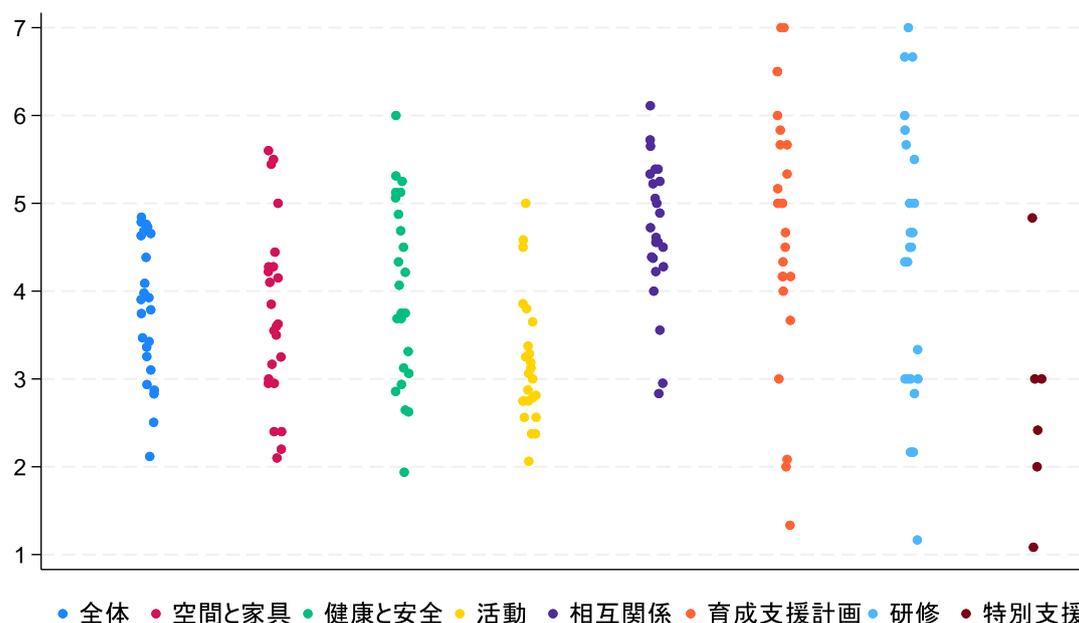


表4は各点数域に位置する施設の割合を示している。全体スコアの分布を確認すると、約80%の施設が「最低限」レベルの3点以上を獲得しており、残りの約20%が「最低限」レベルに達していないことが分かる。「相互関係」や「育成支援計画」、「研修」については5点以上の「よい」レベルの施設の割合が他のサブスケールと比較して高い。

表4 SACERS スコアの点数域の分布

	全体	空間と家具	健康と安全	活動	相互関係	育成支援計画	研修	特別支援
3点未満	20.8	25.0	20.8	45.8	8.3	12.5	16.7	50.0
3点以上5点未満	79.2	58.3	54.2	50.0	50.0	37.5	45.8	50.0
5点以上	0.0	16.7	25.0	4.2	41.7	50.0	37.5	0.0

(注) 数値は該当する施設数の全体における割合を意味する。単位はパーセンテージ。

表5はSACERSスコア間の相関係数を示している。「特別支援」を除き、全体スコアとサブスケール間、また各サブスケールの間での相関関数が非常に高い。このことから、放課後の活動の各側面の質はそれぞれ独立して決まるというより、連動して決定されていると考えられる。

表5 SACERSスコア間の相関関係

	全体	空間と家具	健康と安全	活動	相互関係	育成支援計画	研修	特別支援
全体	1.000							
空間と家具	0.823	1.000						
健康と安全	0.753	0.515	1.000					
活動	0.786	0.685	0.489	1.000				
相互関係	0.795	0.549	0.650	0.519	1.000			
育成支援計画	0.771	0.418	0.577	0.586	0.708	1.000		
研修	0.495	0.234	0.333	0.164	0.518	0.636	1.000	
特別支援	0.600	0.069	0.837	0.774	0.602	0.608	-0.541	1.000

4.2. 放課後の活動の質に影響を与える要因の検証

本節では、前節で報告したSACERSスコアがどのような要因によって決まっているかを、放課後NPOアフタースクールから入手した施設に関する情報および施設運営スタッフの質問紙調査のデータを利用して検証する。分析に使用した施設および運営スタッフに関する変数の記述統計は表6の通りである。

表6 施設および運営スタッフに関する変数の記述統計

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
施設に関する変数¹					
場所（東京圏=1）	24	0.667	0.482	0	1
運営区分（私立=1）	24	0.417	0.504	0	1
設立からの年数（年）	24	9.9	5.3	3	21
常勤スタッフの数（人）	24	2.1	1.3	0	4
非常勤スタッフの数（人）	24	3.4	4.3	0	20
登録児童数合計（人）	24	292.0	225.3	9	661
登録児童数：1年（人）	24	52.0	34.9	2	115
2年（人）	24	51.3	35.1	1	115

	N	平均値	標準 偏差	最小値	最大値
3年(人)	24	50.2	36.7	2	114
4年(人)	24	48.9	40.9	0	114
5年(人)	24	47.3	41.7	0	124
6年(人)	24	42.5	41.2	0	126
平均来室人数/日(一か月平均) ²	16	67.5	33.6	22.7	141
来室児童の学年構成比率 ² :1年	16	0.357	0.084	0.220	0.500
2年	16	0.269	0.040	0.220	0.330
3年	16	0.191	0.044	0.100	0.260
4年	16	0.115	0.057	0.020	0.220
5年	16	0.053	0.030	0.020	0.130
6年	16	0.014	0.017	0.000	0.060
運営スタッフに関する変数					
性別(女性=1)	102	0.853	0.356	0	1
年齢:30歳以下	102	0.314	0.466	0	1
31~40歳	102	0.098	0.299	0	1
41~50歳	102	0.167	0.375	0	1
51~60歳	102	0.275	0.448	0	1
61歳以上	102	0.147	0.356	0	1
管理者(拠点責任者=1)	99	0.081	0.274	0	1
雇用期間(無期=1)	99	0.152	0.360	0	1
週勤務日数(日)	101	3.099	1.315	1	5
就業年数(年)	102	4.010	2.977	1	10
現施設での勤務年数(年)	101	3.277	2.442	1	10
最終学歴:高校・専門学校・専修学校	102	0.255	0.438	0	1
短期大学	102	0.225	0.420	0	1
大学・大学院	102	0.490	0.502	0	1
わからない/答えたくない/その他	102	0.029	0.170	0	1
資格・免許:放課後児童支援員認定資格	100	0.270	0.446	0	1
保育士資格	100	0.090	0.288	0	1
幼稚園教諭関連	100	0.080	0.273	0	1
小学校教諭関連	100	0.050	0.219	0	1
中学校教諭免許	100	0.140	0.349	0	1
高校教諭免許	100	0.120	0.327	0	1
取得していない	100	0.590	0.494	0	1
学校教員勤務(経験あり=1)	102	0.049	0.217	0	1
要支援児童(いる=1)	100	0.650	0.479	0	1
負担感 ³ :事務的な業務が多すぎる	100	1.440	0.808	1	4

	N	平均値	標準 偏差	最小値	最大値
集団やグループとしての規律を保つこと	101	1.693	0.914	1	4
学校との連携・調整	101	1.812	0.868	1	4
運動したり、活動している児童を注意深く見守ること	101	2.218	1.045	1	4
児童からの話しかけや質問に応じること	100	1.580	0.794	1	4
児童がけがや病気をしたときの対応	101	2.188	1.027	1	4
児童に脅されたり児童から暴言を受けたりすること	100	2.210	0.957	1	4
国、地方自治体からの要求の変化に対応すること	100	1.730	0.790	1	4
製作や活動の準備	99	1.788	0.872	1	4
支援員同士の人間関係	101	1.634	0.880	1	4
研修の受講	100	1.740	0.860	1	4
児童同士のトラブルの解決	101	2.257	0.986	1	4
学習の支援	100	1.620	0.814	1	4
保護者の懸念に対処すること	100	2.100	0.870	1	4
特別な支援を要する児童のために活動を適応させること	96	2.031	0.900	1	4
負担感の平均	101	1.869	0.598	1	3.467

(注1) 放課後 NPO アフタースクールより提供された 2023 年 9 月時点の情報。

(注2) 東京圏の施設のみ。

(注3) 負担感に関する項目は全て、「全く感じない」を 1 点、「非常によく感じる」を 4 点として 4 件法で回答。

表 7 は SACERS スコアと施設および運営スタッフの属性に関する変数との間の偏相関係数の結果を示している。観測数が少ないため、「特別支援」のサブスケールの分析は割愛した。前節の表 3 で確認したように、東京圏の施設は A 市の施設よりも SACERS のスコアが高かった。この差は、立地によって学童保育や放課後居場所事業の運営に関する環境が大きく異なっているためと考えられる。施設の立地の違いを考慮せずに SACERS スコアと施設・運営スタッフの変数の関係を検証すると、施設・運営スタッフの変数が施設の立地の影響を強く受けている場合（例えば東京圏の方が常勤スタッフが多いなど）、示された結果が SACERS スコアと施設・運営スタッフの変数との関係ではなく、単に SACERS スコアと変数の背景にある施設の立地の関係を表している可能性

表7 SACERS スコアと施設および運営スタッフの属性と偏相関係数

	全体	空間と家具	健康と安全	活動	相互関係	育成支援計画	研修
施設に関する変数							
私立	-0.33	-0.15	-0.12	-0.44	-0.16	-0.39	0.13
設立からの年数	0.10	-0.04	0.27	-0.07	0.13	0.09	-0.01
常勤スタッフの数	0.60	0.20	0.49	0.43	0.36	0.51	0.29
非常勤スタッフの数	0.60	0.52	0.26	0.58	0.37	0.32	-0.17
登録児童数合計	-0.49	-0.33	-0.31	-0.36	-0.44	-0.34	0.21
登録児童数_1年	-0.39	-0.32	-0.23	-0.29	-0.27	-0.32	0.25
登録児童数_2年	-0.37	-0.19	-0.24	-0.25	-0.40	-0.25	0.14
登録児童数_3年	-0.42	-0.27	-0.29	-0.34	-0.40	-0.29	0.27
登録児童数_4年	-0.44	-0.23	-0.30	-0.31	-0.44	-0.32	0.15
登録児童数_5年	-0.54	-0.32	-0.35	-0.47	-0.47	-0.38	0.21
登録児童数_6年	-0.53	-0.43	-0.30	-0.33	-0.48	-0.32	0.18
平均来室人数	0.70	0.54	0.38	0.43	0.39	0.61	-0.33
来室児童構成比_1年	-0.58	-0.32	-0.34	-0.61	-0.33	-0.56	0.38
来室児童構成比_2年	-0.01	-0.34	0.37	-0.21	0.17	0.12	0.17
来室児童構成比_3年	0.30	0.24	0.10	0.16	0.36	0.13	-0.14
来室児童構成比_4年	0.48	0.37	0.06	0.52	0.14	0.62	-0.27
来室児童構成比_5年	0.33	0.34	0.21	0.67	-0.08	0.09	-0.55
来室児童構成比_6年	0.09	-0.16	0.25	0.16	0.10	0.12	-0.09
運営スタッフに関する変数							
女性	-0.17	0.03	-0.19	-0.14	0.12	-0.37	-0.40
30歳以下	0.21	0.10	0.16	0.01	-0.07	0.38	0.44
31~40歳	0.58	0.68	0.58	0.71	0.23	0.24	-0.49
41~50歳	-0.11	-0.08	0.18	0.31	-0.24	-0.24	-0.38
51~60歳	-0.28	-0.10	-0.46	-0.14	-0.24	-0.14	0.01
61歳以上	-0.10	-0.20	0.00	-0.25	0.42	-0.32	-0.27
無期雇用	-0.47	-0.36	-0.19	-0.32	-0.35	-0.29	-0.08
週勤務日数	-0.31	-0.33	0.12	-0.42	-0.32	-0.13	-0.11
勤務年数	0.24	-0.20	0.26	-0.02	0.40	0.27	0.39
現施設での勤務年数	-0.24	-0.53	-0.09	-0.13	0.01	-0.20	0.10
学歴：高校・専門学校・専修学校	0.62	0.18	0.44	0.48	0.44	0.77	0.21
学歴：短期大学	-0.12	-0.22	-0.07	-0.30	0.27	-0.23	0.07
学歴：大学・大学院	-0.54	-0.11	-0.56	-0.27	-0.62	-0.47	-0.08
学歴：わからない/答えたくない/その他	-0.18	0.16	0.17	-0.08	-0.30	-0.48	-0.44
資格免許：放課後児童支援員	-0.16	-0.15	0.15	-0.26	-0.29	0.06	-0.12
資格免許：保育士	-0.13	-0.20	-0.03	-0.46	0.15	-0.05	0.05
資格免許：幼稚園関連	-0.07	0.01	-0.13	-0.39	0.26	0.01	-0.05
資格免許：小学校関連	-0.18	0.22	-0.06	-0.43	-0.04	-0.38	-0.24
資格免許：中学校関連	-0.58	-0.46	-0.32	-0.41	-0.50	-0.38	0.00
資格免許：高校関連	-0.56	-0.41	-0.35	-0.35	-0.51	-0.32	-0.06
資格免許：取得していない	0.34	0.30	0.01	0.40	0.43	0.07	0.04
学校教員勤務経験あり	-0.11	-0.14	0.02	0.08	0.03	-0.12	-0.17
要支援児童あり	0.19	0.31	0.29	0.32	0.06	-0.08	-0.48
負担感：事務的な業務が多すぎる	-0.26	-0.12	0.10	-0.32	-0.37	-0.26	-0.11
負担感：集団やグループとしての規律…	0.24	-0.04	-0.03	-0.03	0.08	0.61	0.73
負担感：学校との連携・調整	0.08	-0.15	0.31	0.00	-0.15	0.02	0.44
負担感：運動したり、活動している児童…	0.23	-0.05	-0.02	-0.09	0.20	0.41	0.80
負担感：児童からの話しかけや質問に…	0.58	0.28	0.27	0.14	0.46	0.69	0.61
負担感：児童がけがや病気をしたときの…	0.22	0.16	-0.08	-0.02	0.44	0.14	0.12
負担感：児童に脅されたり児童から暴言…	0.36	0.20	0.06	0.17	0.58	0.30	0.05
負担感：国、地方自治体からの要求の変化…	0.37	0.22	0.32	0.10	0.69	0.62	0.30
負担感：製作や活動の準備	-0.02	-0.19	-0.20	-0.06	-0.07	0.33	0.43
負担感：支援員同士の人間関係	0.40	0.17	-0.09	0.08	0.44	0.70	0.48
負担感：研修の受講	-0.02	-0.03	-0.20	-0.28	0.11	0.23	0.31
負担感：児童同士のトラブルの解決	0.53	0.06	0.16	0.35	0.72	0.52	0.36
負担感：学習の支援	0.19	-0.08	0.14	-0.20	0.40	0.35	0.24
負担感：保護者の懸念に対処すること	0.23	-0.08	0.31	-0.11	0.38	0.32	0.18
負担感：特別な支援を要する児童のため…	0.25	-0.05	-0.09	-0.16	0.39	0.48	0.61
負担感の平均	0.47	0.05	0.10	-0.03	0.56	0.72	0.74

(注) 数値は施設の場所(東京圏か A 市か)の影響を除去したうえで算出した偏相関係数。「平均来室人数」から「来室児童構成比_6年」までは東京圏の施設しかデータがないため、どの変数もコントロールしていない相関係数の結果を示している。

があり、SACERS スコアと施設・運営スタッフの変数との関係を見誤ってしまう。この問題に対処するために、本研究では施設の場所（東京圏か A 市か）の影響を除去したうえで相関係数を算出した。このようにして求めた相関係数は「偏相関係数」と呼ばれる。ただし、「平均来室人数」から「来室児童構成比_6年」までは東京圏しかデータがないため、施設の場所の影響をコントロールしていない相関係数の結果を示している。

表7の上部に示されているように、施設に関する変数の中で SACERS のスコアと高く正に相関しているのは常勤・非常勤スタッフの数である。これらの変数はサブスケールについても概ね正に相関している。これらは資金や運営経験、運営に携わる人の数によって施設運営が良好になり、活動の質が高まることを示唆している。登録児童数については「研修」以外は負に相関しており、学年ごとの児童数で傾向に違いは見られない。一方で、平均来室人数は正に相関している。一般的に、施設の利用する児童が多いと、一人当たりの施設内の空間や安全面、活動内容、支援員との関係などが制約され、質が下がると考えられる。しかし、平均来室人数との相関は正で、相関係数の絶対値が登録児童数に匹敵する大きさであり、なぜこのように相反する結果となったかについては判然としない。

表7の中頃より下は運営スタッフに関する変数との偏相関係数を示しており、各属性に当てはまるスタッフの割合や、週勤務日数など連続変数の場合はその平均値との相関関係を示している。特筆すべき結果に関して、スタッフの年齢に関しては30歳以下や30代の割合が正に相関している一方で、それ以上の年代の割合はほとんど相関がないか、わずかに負に相関している。学歴や資格免許については正の相関が見られなかった。その他、要支援の児童の割合が正に相関している。

スタッフの負担感については、特に「相互関係」や「育成支援計画」、「研修」との間に高い正の相関があることが確認できる。相関係数が高かった負担感の項目は、「児童からの話しかけや質問に応じること」や「児童がけがや病気をしたときの対応」など児童との関係によるものや「国、地方自治体からの要求の変化に対応すること」、「支援員同士の人間関係」、「学習の支援」、「保護者の懸念に対処すること」、「特別な支援を要する児童のために活動を適応させること」などが挙げられる。これらの結果から、スタッフは負担に感じながらも活動を続けた結果、SACERS の調査でその質の高さが観測されたと

解釈できる。

以上の結果から、運営に携わる人の数など運営に関する状況が放課後の活動の質に影響を与えている可能性が示唆された。また、スタッフの負担感と活動の質の間にも正の相関が確認されたため、スタッフが負担に感じながらも活動の質を高めている可能性が示唆される。ただし、以上の結果について、現時点では背景にあるメカニズムを推察するには情報が不足している。また、相関係数の算出のもとになった観測数が小さく、施設によってスタッフの質問紙調査の回答数にバラつきがあることから、今後調査の規模を拡大したり、スタッフの回答を増やしたりすると、分析結果が大きく変わる可能性がある。したがって、このようなデータの制約から本節の分析結果には放課後の活動の質の決定要因について一般化して論じられるほどの信頼性はなく、あくまで今回の調査内で確認されたことと解釈するのに留めるのが適当であると考えられる。

4.3. 放課後の活動の質が児童に与える影響の検証

本節では、放課後の活動の質を表す SACERS のスコアが児童のアウトカムとどのような関係にあるのかを保護者の質問紙調査のデータを利用して検証する。分析に使用した施設および運営スタッフに関する変数の記述統計は表 8 の通りである。とりわけ、アウトカムの一つの SDQ の変数について、日本における 7-9 歳児や 10-12 歳児の標準値とほぼ同等の数値である¹。自尊感情についても勝浦・浜崎（2023）に近い結果になっている。以上の結果から、これらのアウトカムに関する測定は問題なく実施されたと思われる。

¹ このサイト (<https://ddclinic.jp/SDQ/standardvalueinjapan.html>) で紹介されている標準値によると、総合的困難さの平均値は 7-9 歳児が 8.4 点、10-12 歳児が 7.1 点である。下位尺度についても概ね本研究の対象となった児童の平均値と近い数値となっている。

表8 保護者に関する変数の記述統計

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
保護者および児童に関する変数¹					
場所（東京=1）	349	0.788	0.409	0	1
施設の運営区分（私立=1）	349	0.507	0.501	0	1
回答者（母=1）	349	0.914	0.281	0	1
児童の性別（女子=1）	349	0.510	0.501	0	1
学年	349	2.192	1.196	1	6
施設の利用頻度（日/週）	348	2.787	1.872	0	5
生まれ月	349	6.438	3.511	1	12
出生体重が2500g未満	349	0.106	0.308	0	1
保育園に通っていた	349	0.467	0.500	0	1
幼稚園に通っていた	349	0.355	0.479	0	1
認定こどもに園通っていた	349	0.123	0.329	0	1
習い事：スポーツ	349	0.622	0.486	0	1
剣道・柔道などの武術	349	0.083	0.276	0	1
バレエ・ダンスなどの舞踊	349	0.201	0.401	0	1
英会話やプログラミング	349	0.275	0.447	0	1
習字やそろばん	349	0.209	0.407	0	1
音楽・絵・工作	349	0.393	0.489	0	1
学習塾・家庭教師・通信教育	349	0.427	0.495	0	1
読書冊数：読まない	349	0.152	0.359	0	1
1冊	349	0.126	0.332	0	1
2～3冊	349	0.281	0.450	0	1
4～7冊	349	0.175	0.380	0	1
8～11冊	349	0.066	0.248	0	1
12冊以上	349	0.160	0.368	0	1
わからない	349	0.040	0.197	0	1
世帯人数	349	2.857	0.987	1	8
外国籍世帯	347	0.017	0.131	0	1
世帯年収：答えたくない	348	0.204	0.404	0	1
500万円未満	348	0.103	0.305	0	1
500～800万円	348	0.129	0.336	0	1
800～1000万円	348	0.103	0.305	0	1
1000万円以上	348	0.460	0.499	0	1
母の職業：常勤	349	0.507	0.501	0	1
自営業	349	0.106	0.308	0	1
非常勤	349	0.244	0.430	0	1
その他	349	0.017	0.130	0	1
無職	349	0.126	0.332	0	1
父の職業：勤め	344	0.773	0.419	0	1
自営業	344	0.195	0.397	0	1
その他	344	0.026	0.160	0	1

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
無職	344	0.006	0.076	0	1
父の学歴；答えたくない	347	0.052	0.222	0	1
大卒以外	347	0.251	0.434	0	1
大卒以上	347	0.697	0.460	0	1
母の学歴；答えたくない	348	0.032	0.175	0	1
大卒以外	348	0.391	0.489	0	1
大卒以上	348	0.578	0.495	0	1
施設に対する評価に関する変数					
満足度 ¹	349	4.341	0.755	1	5
評価 ² ：室内	316	5.759	1.366	1	7
分からない	349	0.095	0.293	0	1
評価；学習や活動のための設備	300	5.707	1.347	1	7
分からない	349	0.140	0.348	0	1
評価；衛生管理の実践	274	5.876	1.328	1	7
分からない	349	0.215	0.411	0	1
評価；安全対策の実践	270	5.778	1.399	1	7
分からない	349	0.226	0.419	0	1
評価；製作に関する活動	308	6.192	1.158	1	7
分からない	349	0.117	0.322	0	1
評価；言葉や読みに関する活動	236	5.085	1.561	1	7
分からない	349	0.324	0.469	0	1
評価；算数に関する活動	180	4.289	1.534	1	7
分からない	349	0.484	0.500	0	1
評価；科学や自然に関する活動	231	5.121	1.530	1	7
分からない	349	0.338	0.474	0	1
評価；施設スタッフと児童の関係	331	6.184	1.216	1	7
分からない	349	0.052	0.221	0	1
児童のアウトカムに関する変数					
SDQ：総合的困難さ	347	8.692	4.871	0	32
SDQ：情緒の問題	348	1.914	1.953	0	10
SDQ：行為の問題	348	1.718	1.441	0	7
SDQ：多動／不注意	347	3.032	2.120	0	10
SDQ：仲間関係の問題	348	2.043	1.683	0	10
SDQ：向社会的行動	348	6.601	2.127	0	10
自尊感情：全体	349	28.6	5.247	0	40
自尊感情：自己信頼・主体性	349	16.9	3.592	0	24
自尊感情：協調性・達成意欲	349	11.7	2.447	0	16
1か月以内に病気やけがの経験あり	348	0.457	0.499	0	1
1年以内に入院の経験あり	349	0.052	0.221	0	1

(注1) 「まったく満足していない」から「とても満足している」の5件法で回答を求め1～5点に点数化

(注2) 評価に関する項目は全て、「悪い」を1点、「良い」を7点として7件法で回答を求めた。「分からない」は評価せずに「分からない」と回答した保護者の割合。

次に、図2に SACERS のスコアと施設別に平均した児童の総合的困難さのスコアの関係を図示した。観測数は18である。各散布図に示されているように、SACERS のスコアと児童の総合的困難さには正の関係があるように見える。SACERS のスコアが高い施設ほど児童の総合的困難さのスコアが高い、すなわち発達段階において困難さを抱えている児童の割合が高い。紙幅の関係で本報告書には示していないが、総合的困難さの下位尺度である「情緒の問題」「行為の問題」「多動／不注意」「仲間関係の問題」においても同様に SACERS のスコアとの間に正の関係が認められた。

図2 SACERS スコアと総合的困難さの関係

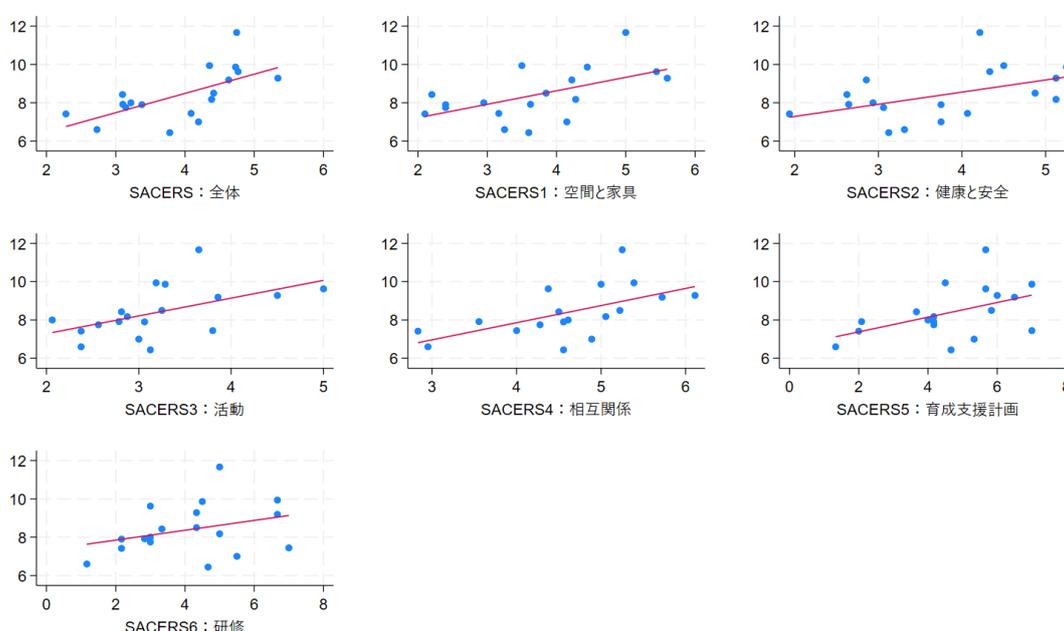


図3や図4は SACERS スコアと向社会的行動や自尊感情の関係を示しているが、明確な関係は確認できない。自尊感情の下位尺度である「自己信頼・主体性」にはわずかに正の関係が見られたものの、「協調性・達成意欲」については負の関係が確認された。

以上の散布図から確認した SACERS スコアと児童のアウトカムの関係は施設ごとの児童の置かれた環境の違いの影響を考慮していない。したがって、両者の関係をより精緻に検証するために、児童レベルの重回帰分析により児童を取り巻く環境の影響を除去したうえで、両者の関係を検証することとする。

図3 SACERS スコアと向社会的行動の関係

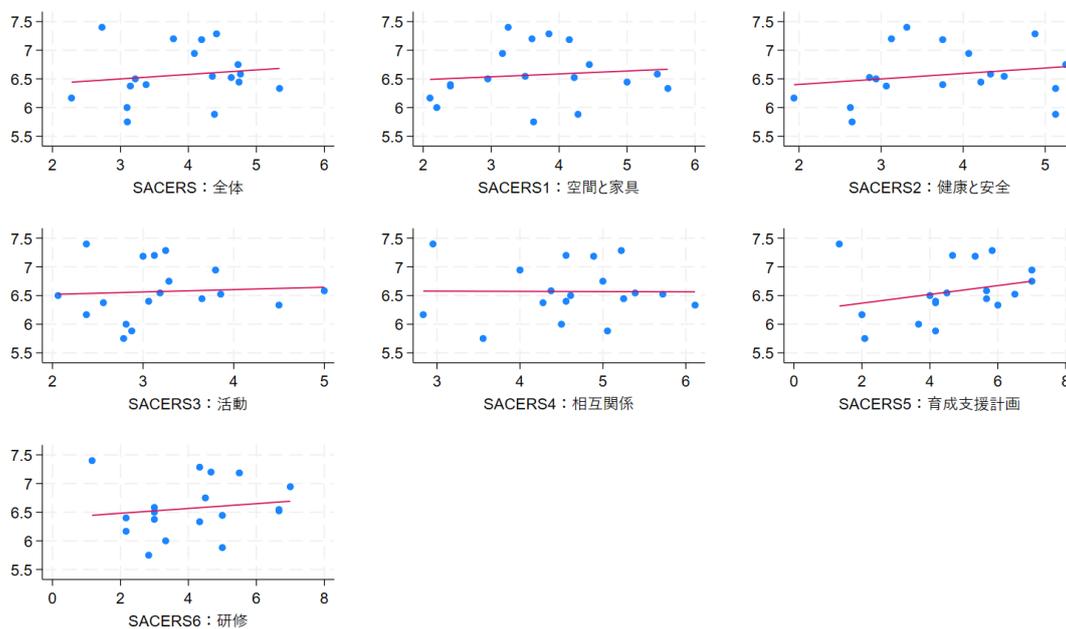


図4 SACERS スコアと自尊感情の関係

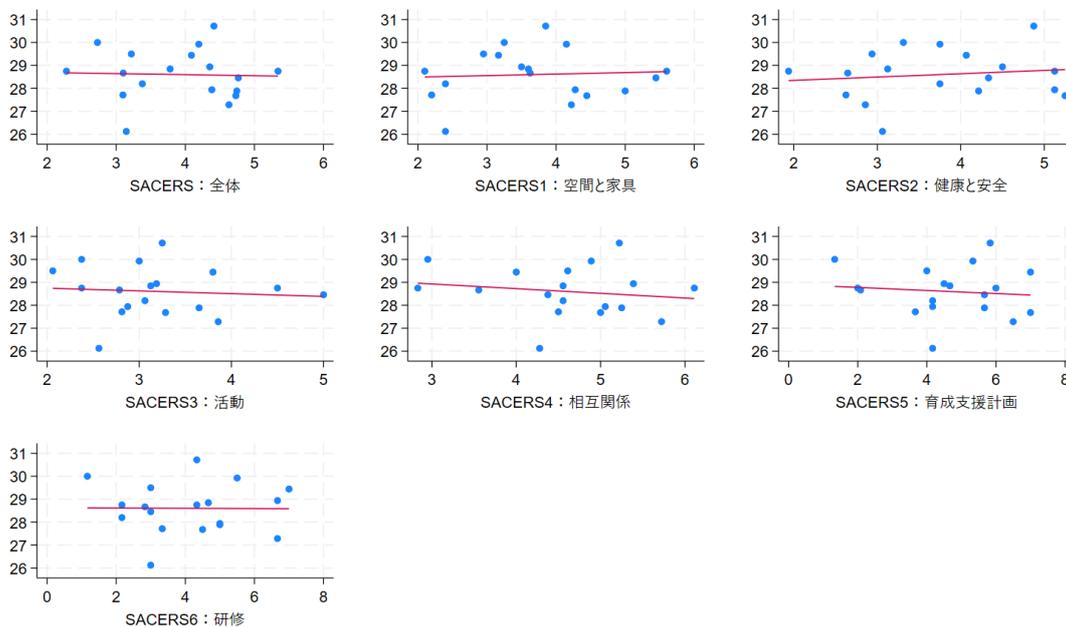


表9に重回帰分析の結果を示した。重回帰分析では、総合的困難さおよび向社会的行動、自尊感情の各被説明変数に対して、各SACERSスコアは同時には入れず、一つずつ説明変数として加え分析を行った。制御変数には、児童の性

別、学年、生まれ月、出生体重が 2,500g 未満か、保育園の通園、各習い事を行っているか、読書冊数、世帯年数、回答者が母親か、施設の利用頻度、保護者の学童保育への満足度、東京圏の施設かどうか、学校が私立かどうか、を含めた。このように制御変数に児童に関する属性を含めることで、このような属性に影響されない SACERS スコアと児童のアウトカムの関係を検証することができる。

表 9 に示されている数値は各 SACAERS スコアに係る係数の推定値であり、スコアが 1 点上がると被説明変数のスコアが何点増加もしくは減少するかを意味している。総合的困難さへの影響について、「育成支援計画」を除いて係数は正であり、この結果は図 2 で確認した傾向と整合的であるが、ほとんどが統計的に有意ではないため確かなことは言えない。「相互関係」のスコアのみ統計的に有意な結果となっており、これは「相互関係」のスコアが高い施設の児童ほど総合的困難さが高いことを意味している。向社会的行動や自尊感情については、それぞれ「育成支援計画」や「空間と家具」について係数が正で、わずかに統計的に有意な結果となっている。これらは各スコアが高い施設ほど児童の向社会的行動や自尊感情が高いことを意味している。

表 9 重回帰分析の結果

	SDQ： 総合的困難さ	SDQ： 向社会的行動	自尊感情： 全体
SACERS：全体	1.066	0.112	0.915
空間と家具	0.594	-0.033	0.862*
健康と安全	0.411	0.051	0.353
活動	0.412	0.054	0.626
相互関係	0.921**	-0.031	-0.033
育成支援計画	-0.056	0.191*	0.281
研修	0.090	0.006	-0.040
N	345	346	347

(注) 各数値は各 SACAERS スコアに係る係数の推定値。**、*はそれぞれ 5%、10%水準で統計的に有意であることを示している。検定には施設レベルのクラスター標準誤差を用いた。

表 10 サブグループの重回帰分析の結果

	N	SDQ： 総合的困難さ	N	SDQ： 向社会的行動	N	自尊感情： 全体
東京圏	271	2.229***	272	-0.138	273	1.008
A 市	74	0.437	74	0.390	74	0.512
公立	172	-0.287	172	0.301	172	0.578
私立	173	2.139***	174	0.087	175	0.632
登録児童数≦中央値	185	-0.275	185	0.515**	185	1.387**
登録児童数>中央値	160	1.183	161	-0.576	162	-1.188
男児	170	1.866	170	-0.353	170	-0.756
女児	175	-0.095	176	0.234	177	2.728***
1-3 年生	296	0.732	296	0.023	297	1.380*
利用頻度 0 日を除く	294	1.097	295	0.090	295	0.274
保護者が「とても満足」	165	1.307*	165	0.498	166	0.960
保護者の満足度が 「とても満足」未満	180	0.951	181	0.001	181	0.656

(注) 各数値は SACAERS の全体スコアに係る係数の推定値。**、*はそれぞれ 5%、10%水準で統計的に有意であることを示している。検定には施設レベルのクラスター標準誤差を用いた。

より詳細に分析するために、サンプルの属性ごとにサブグループを作り、サブグループごとに同様の重回帰分析を行った（表 10）。紙幅の関係でここでは SACERS の全体スコアを説明変数とした結果を示す。表の数値は SACAERS の全体スコアに係る係数の推定値であり、表 9 と同様に全体のスコアが 1 上がると、被説明変数のスコアが何点増加もしくは減少するかを意味している。総合的困難さの結果を見ると、東京圏や私立、保護者の満足度が「とても満足」のサブサンプルで推定値が正で有意である。向社会的行動については登録児童数とその中央値より少ない施設で推定値が正で有意である。自尊感情については登録児童数とその中央値より少ない施設や女児、1-3 年生について推定値が正で有意であった。

以上の分析結果をまとめると、東京圏や私立の施設において SACERS で測った放課後の活動の質と総合的困難さとの間に正で統計的に有意な関係があることが分かった。一見すると、この結果は質の高い放課後の活動が児童の情緒や行動に関する問題を増長させる可能性を示唆しているが、解釈には注意が必要である。まず、問題行動の多い児童を抱える施設ほど活動の質の向上に取り組

んだという逆因果の可能性が考えられる。この逆因果の可能性は、前節で確認した運営スタッフの児童の対応に関する負担感と SACERS スコアとの間に正の相関があったことと整合的である。

次に考えられるのは、質の高い施設は児童にとって居心地が良い場所であるため、質の高い施設ほど多様な児童が利用するようになることで、その結果問題行動を抱えている児童がより多く利用している可能性がある。言い換えると、質の低い施設は居心地が悪いため、問題行動のある児童が利用を諦めることにより、残った利用者だけを調査すると総合的困難さが低い結果になったのかもしれない。また、質の高い施設ほど保護者が施設の活動を評価し、協力的になり、質問紙調査の回収率が高くなることで、児童の問題行動に関する回答を多く拾った可能性もある。質の高い施設ほど運営者と保護者との間に信頼関係があるため、児童の問題について正直に回答したかもしれない。表2に示したように、保護者の回答数には施設によりバラつきがあり、回答がゼロの施設もあった。今回の分析では回答を得られなかった保護者の児童の状況については考慮できていない。

ただし、以上の点はあくまで仮説であり、仮説が成り立っているかを確認するためにはより詳細な分析や調査を行う必要がある。

その他に特筆すべき点として、向社会的行動や自尊感情への影響について、登録児童数が相対的に少ない施設では、SACERS のスコアと正で有意な関係が確認された。これは、比較的混雑していない施設では、活動の質が高いと児童の向社会的行動や自尊感情が改善するというを示している。登録児童数が相対的に多い施設での推定値と比較すると、総合的困難さを含め推定値の符号が逆になっており、放課後の質と児童のアウトカムの関係性が全く異なることを示唆している。児童の性別も同様に男児と女児で符号が逆になっており、女児に対しては放課後の質が良い影響を与えている可能性が示唆されている。

このように、条件を絞ると、放課後の質が児童の発達および非認知能力の向上につながる可能性が推察されるが、全体としては確かな結果は得られなかった。分析に使用したデータの小ささや調査対象となった施設が特殊であった可能性、すなわち全国の他の学童関連の施設を代表していると言えるかは疑問であることを踏まえると、前節と同様に本節の分析結果の一般化可能性については注意が必要と考えられる。

第5章 まとめ

本研究では、放課後 NPO アフタースクールの協力のもと、放課後の過ごし方が児童の発達および非認知能力などの向上につながるかを明らかにするため、放課後 NPO アフタースクールが直営、または運営をサポートしている放課後の居場所および学童の施設を対象とした SACERS の調査および、施設運営に携わるスタッフおよび利用者の保護者を対象とした質問紙調査のデータをもとに分析を行った。

分析の結果、放課後の活動の質には運営に携わる人の数など運営に関する状況が影響を与えている可能性が示唆された。一方で、スタッフの負担感と活動の質との間に正の関係が確認され、負担に感じながらも活動の質を高めている現状が浮き彫りになった。放課後の活動の質が児童に与える影響については、東京圏や私立の質の高い施設では児童の総合的困難さが高いという結果となったが、これについては調査の背景にあるさまざまな要因が影響した可能性がある。その他、登録児童数が相対的に少ない施設や女児に限定すると、活動の質が児童の向社会的行動や自尊感情に良い影響を及ぼしている可能性が示された。ただし、以上の結果は一般的であるとは言えない特殊で小さなサンプルから得られたものであるため、解釈には注意が必要であり、放課後の活動の質の影響をより精緻に検証するためには今後さらなる検証が必要である。

参考文献

- Asakawa, S., & Ohtake, F. (2022). Impact of COVID-19 School Closures on the Cognitive and Non-cognitive Skills of Elementary School Students. RIETI Discussion Paper Series, 22-E-075.
- Baker, M., Gruber, J., & Milligan, K. (2019). The Long-Run Impacts of a Universal Child Care Program. *American Economic Journal: Economic Policy*, 11(3), 1–26.
- Japel, C., Tremblay, R. E., & Côté, S. (2005). Quality Counts! Assessing the Quality of Daycare Services Based on the Quebec Longitudinal Study of Child Development. *IRPP Choices* 11 (5).
- Kautz, T., Heckman, J. J., Diris, R., ter Weel, B., & Borghans, L. (2014). Fostering and Measuring Skills: Improving Cognitive and Non-cognitive Skills to Promote Lifetime Success. *OECD Education Working Papers*, No. 110, OECD Publishing, Paris.
- Liu, M., Wu, L., & Ming, Q. (2015). How Does Physical Activity Intervention Improve Self-Esteem and Self-Concept in Children and Adolescents? Evidence from a Meta-Analysis. *PloS One*, 10(8), e0134804.
- 浜銀総合研究所 (2021). 青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書. https://www.mext.go.jp/content/20210908-mxt_chisui01-100003338_2.pdf.
- 勝浦美和・浜崎隆司. (2023). 他者評価式幼児用自尊感情尺度の開発. *応用教育心理学研究*, 39(2), 3–21.
- 日本財団・三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング(2021). コロナ禍が教育格差にもたらす影響調査－調査レポート－. https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2021/06/new_pr_20210629.pdf.

参考資料1 「子どもの強さと困難さアンケート」の質問項目

情緒の問題

- ・ 頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうったえる
 - ・ 心配ごとが多く、いつも不安なようだ
 - ・ おちこんでしずんでいたたり、涙ぐんでいたたりすることがよくある
 - ・ 目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす
 - ・ こわがり、すぐにおびえたりする
-

行為の問題

- ・ カツとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある
 - ・ 素直で、だいたい大人のことをよくきく (R)
 - ・ よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする
 - ・ よくうそをついたり、ごまかしたりする
 - ・ 家や学校、その他から物を盗んだりする
-

多動/不注意

- ・ おちつきがなく、長い間じっとしてられない
 - ・ いつもそわそわしたり、もじもじしている
 - ・ すぐに気が散りやすく、注意を集中できない
 - ・ よく考えてから行動する (R)
 - ・ ものごとを最後までやりとげ、集中力もある (R)
-

仲間関係の問題

- ・ 一人でいるのが好きで、一人で遊ぶ事が多い
 - ・ 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる (R)
 - ・ 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ (R)
 - ・ 他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする
 - ・ 他の子どもたちより、大人といるほうがうまくいくようだ
-

向社会的な行動

- ・ 他人の気持ちをよく気づかう
 - ・ 他の子どもたちと、よく分け合う (おやつ・おもちゃ・鉛筆など)
 - ・ 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける
 - ・ 年下の子どもたちに対してやさしい
 - ・ 自分からすすんでよく他人を手伝う (親・先生・子どもたちなど)
-

(注) R は反転項目。各質問は「あてはまらない」、「まああてはまる」、「あてはまる」の3件法で回答を求め、項目ごとに合計点を算出。

(出所) <https://ddclinic.jp/SDQ/index.html>

参考資料2 「他者評価式幼児用自尊感情尺度」の質問項目

自己信頼・主体性

- ・ 大勢の前でも、積極的に発言する
 - ・ 自分に自信をもって様々なことに取り組もうとする
 - ・ 周りの意見に流されず、自分の考えで行動できる
 - ・ 初めてのことや人にも自分から積極的に関わる
 - ・ 嫌なことや困ったことを相手にきちんと伝えることができる
 - ・ 自分の思いを素直に表現できる
-

協調性・達成意欲

- ・ 時間がかかっても途中であきらめず最後までやりとげる
 - ・ 人の話をよく聞くことができる
 - ・ 友達の意見を聞き受け入れたり、友達の意見を取り入れて新しいアイデアを出したりする
 - ・ 思い通りにならないことがあっても気持ちに折り合いをつけて、次の行動に移すことができる
-

(注) 各質問は「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「少しあてはまる」、「とてもあてはまる」の4件法で回答を求め、項目ごとに合計点を算出。

(出所) 勝浦・浜崎 (2023)